

光の子



No.160 2013.11.4

●年間聖句 あなたの口を開いて弁護せよ。ものを言えない人を、
犠牲になっている人の訴えを。(箴言3 1章8節)



「夏の思い出」

挿絵・中島由起子

「緑の夜」

乳欲りてなく嬰の声も緑の夜

柩行く茅花流しに揉まれつつ

鳶が泛き鴉が泛いて夕焼くる

安居寺夜は月影に抱かれて

夕涼や離ればなれに漁りの灯

明易の軒にひしめく風の音

潮満ちてくる風鈴を騒がせて

黛 執

（「春野」主宰）

発見者の名前からウェルニッケ野
と呼ばれる）など有名である。
しかし、今回の話はちよつと違
っている。
意識のある状態の患者の痛覚ニ
ューロン（神経細胞）の局在する

ミラーニューロン — 他人の痛みを我が痛みとする心 —

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

全体を十分に読み解くのはなか
な困難なのだが、非常に興味あ
る問題を提示していると思われる
一冊の本をいま読み続けている。
V・S・ラマチャンドラン著「脳の
なかの天使」という本である。

著者は神経科学
者で、脳に起こ
った病変の位置
的な関係から、
その脳局所の機
能を推定するこ
うな方法論を用
いて、ヒトの心
の問題を解析し
ている。

脳機能の局在
に関しては、す
でに多くの知見
が得られており
、発語はできるけ
れども、言葉の
意味が理解でき
ない患者の障害
部位から同定さ
れた感覚性言語
野（一般的には

部位の活動電位を測定していたと
ころ、患者自身が痛くされた時だ
けでなく、他の患者が痛くされる
のを見ていた時もこの局所の活動
電位が測定されたのである。その
ほかの色々な現象から、「誰かが
何かをしているのをあなたが見る
たびに、あなたの脳で、あなたが
同じことをするときに使われるニ
ューロンが活性化」（前掲書）
ということが明らかになったので
ある。相手の痛みを我がものとし
て感じる心の存在が脳の局在機能
として、科学的に証明されたこと
になる。「鏡の神経細胞」という意
味でミラーニューロンと名付けら
れた。

そして、このミラーニューロン
は、相手の鏡に映し出された自分
を見つめるという働きを介して、
自己認識にも関わっているだろう
と著者は述べている。

このミラーニューロンは、外界
の刺激によって誘導される種々の
神経・精神活動の調節を広範囲に
行っていることも明らかになり、
相手の痛みを我が痛みとする心が、
私たち人間が人間らしく生きてい
く上で、重要な働きをしているこ
とを示唆している。「優しさとは
相手の立場に立つてものを考える
こと」と長いこと学生に言ってきた
私は、なぜか嬉しい。

さて、こんな高尚な話とは全く
別の世界の話なのだが、最近鏡を
見て考えこむことが多くなった。
いま勤務している老健施設には、
私の居室である施設長室からトイ
レに行く角のところに大きな等身
大の鏡がある。ナルシストではな
いが、我が姿が鏡に映しだされた
のを見る。「今日は二日酔いの顔
だなあ。」「そんな沈んだような顔
をしちゃだめだよ」。ある時までは、
顔だけを見ていた。

ところが、最近は全身像が目に入
り、「なんとと胸長の格好の悪い
人間だなあ」とほとんど毎日思う。
そんなことは分かっていたはずで
あるが、こう毎日気付かされると、
なんともばつが悪い。

格好だけならまだしも、どうし
たわけか、来し方の生き様が、走
馬灯のように次々に意識の鏡に映
し出される。一言でいえば、不器
用で、お人よしで、他人の助けな
しには、75歳の後期高齢者になる
まで、満足に生きてはこれなかつ
ただろうという思いが、多くの例
示とともに毎日のように覆いかぶ
さってくる。

10年以上乗って、総身傷だらけ
になった車を見て、妻はへそくり
で新しい車を買ってくれた。なん
とトヨタのAQUAである。ファイ
トシルバーを途中でブルーに変え

でもらった。なんとも若返った感
じである。ところが、4か月でパ
ック中にこすってしまい、5万円
なにがしの出費。なんとも忌々し
い。

ヨーロッパ旅行に買って持って
行った20数万円もしたパナソニッ
クのLet's Note。ホテルで酔っぱ
らってパソコンたいて、コップ
の水がこぼれて、「修理できませ
ん」という。

大学教授になって、学長になつ
て、自分もそれなりの仕事をして
きたかな等と思っていたが、とん
でもない話で、すべては妻の引き
回しのなかで踊っていたというこ
とらしい。

ミラーニューロンは自己認識に
も関わるという。後期高齢者にな
ってミラーニューロンが働いて、
来し方を見たら、それは茶番だつ
たという話では、少しかわいそう
だが、ミラーニューロンも老化と
ともに機能障害に陥ってくるとす
れば、そんなに気にすることもな
いか。



児童養護施設の今・これから

理事長 菅原 哲男

社会福祉法人光の子どもの家は、
創立30周年を目前にしている。
これまで、110名の子どもた
ちとその親たち、またそれと同じ
ほどのはたらき人たちと出会い、
悲しみを共にし、喜びを同じくし
ながらここまでたどり着いている。
さて、厚生労働省HPによれば
全国の児童相談所の児童虐待相談
処理件数は、平成21年度に442
11件、22年度に56384件、
23年度には59919件となり、
平成24年度にはなんと66807
件に上っている。

その一方、子どもたちの絶対数
は激減しているのである。ちなみ
に、光の子どもの家が開設された
頃、地域の中学校は1学年6クラ
スあったものが、今は3、4クラ
スを維持しているのみである。

これはとりもなおさず、この国
の子どもたちの生きている状況の
劣化・悪化を意味している。年を
経るごとに子どもたちは生きにく
くなっていて、それに生きやすく
なる見通しを持たないままなので
ある。

被虐待の子どもが年率10%前後
の割合での増加に対し、全児童養
護施設の定員数はこの数年、1%
に届かない増減を前後しているの

だ。

このような児童養護施設の総定
員数は行政的には概ね何もしてい
ないことと同義ではないだろうか。
要保護の子どもが増加率と比し
て十分の程度の定員の推移とは、
児童養護施設等の保護の必要な子
どもたちの置かれて状況が重度化
していることになるだろう。

児童養護施設でははたらき人た
ちの関わる子どもたちの持つてい
る育ちの問題や成長の課題などは、
ほんの5年ほど前と比較にならない
ほどの重篤化は実感としてある。

30年ほど前に光の子どもの家の
創設時子どもの入所定員は30名だ
った。その頃12名の職員数で子ど
もたちと暮らし始めた。それから
15年ほどして子どもを6名増員せ
ざるを得なかったが、今は職員数
が24名となっている。

30年ほど前ははたらき人の質量が
かなりよかったのではないと思え
る。過ぎたことのよい思い出効
果はあるだろう。それを差し引い
てもそう思えて仕方がないのであ
る。それを子どもの持つ課題や欠
けの重篤化というのは乱暴だとは
思うが、実感でもあるのだ。

さて、だからどうするのか。子
どもの負わされた課題の重篤化を

どう解決していくのか。それが児
童養護施設の特に関心したのをは
たらきに突きつけられた問題なので
ある。

子どもたちにはないが、大人た
ちには逃れられる術がある。帰る
家を持っている。愛して待ってい
てくれる家族があるだろう。とこ
ろが只でさえ貧しい子どもたちの
状況は、どんなに児童養護施設が
劣化したとしても、そこ以外にい
る場所はないのである。

ないものを捜しては悲しく
なるし、その上徒労でもある。
驚くばかりに治癒していく力を
みってきた。訂正し建て治す家族た
ちの力を信じよう。

法や制度などがなかった頃から
人はそうして生き続けてきたのだ。
それをもう少し生きやすくするた
めの約束事として法や制度は生ま
れてきたのだ。条件で子どもは育
たない。人を愛することは条件で
はない。ひたすら、子どものため
の子ども施設運営に努める以外
に道はない。



「共育ちカンガルー日記」

(25) 星に願いを

近藤みちる

「七夕祭の短冊です。ユキちゃんの願いごとを聞いて、お家で書いて来てください。」

学期末の個人面談の席で、私は担任の先生から短冊を手渡された。廊下には大きな笹飾りが立てられ、クラスメイト達の願いごとが書かれた色とりどりの短冊が賑やかに飾り付けられていた。短冊にはそれぞれ「ケーキやさんになれますように」「キョウリユウジャーになれますように」など、可愛らしい願いごとが書かれてあった。

「今日のクラス活動でみんなで書きました。ユキちゃんにも願いごとを聞いてみたんですが、難しかったみたいで。私がケーキ屋さんになりたい？って聞くと、ケーキ屋さんになりたいたって答えてくれましたが、よく考えたらユキちゃんケーキ嫌いでしたよね。それで、今度はお花屋さん？って聞いてみたら、お花屋さんって答えるんです。私が勝手に決めつけて書いてしまうことになりそうだったので、お母さんをお願いしてみようと思ひまして。」

そのときの様子が目に浮かんだ。確かにユキには難しい課題だったことだろう。質問の意味も理解できなかっただろうし、たとえ意味は理解できても、自分の「願い」を言葉で表現することは、ユキにとって最も苦手なこと。みんながワイワイと楽しそうに願いごとを書いている中で、一人だけ何も書けなかったユキの気持ちを感じる、胸が痛んだ。

ユキはこの春、待望の正式入園を果たし、四月はとにかく毎日通えるだけで楽しくて仕方がないといった感じだった。園での一日の流れを覚えてしまうと、自分なりに見通しを立てながら落ち着いてクラスの中で過ごせるようになった。毎日の日課やお当番の仕事なども、見よう見真似であつという間に覚え、ピアノや調理活動など初めて体験することでも、お友達を手本にして日に日に上達していった。お友達と同じことを同じように出来ることが、ユキにとっては何より楽しく、自信につながっているようだった。

五月の連休が明けると、園ではク

ラス活動の内容がステップアップし、グループワークなどの共同作業や園児自身で考えて取り組む課題が多くなった。行事も増えた。ユキにとっては苦手なことの連続。それでも最初のうちはついて行こうと必死だった。が、上手く出来ないことが続いたのだから、すっかり自信を失くし、だんだん幼稚園を嫌がるようになっていった。五月の末には完全に登園拒否に陥り、私はこれ以上ユキに無理をさせないために、一週間園をお休みさせた。幼稚園のハードルはユキには高すぎたのだろうか。今はこれ以上追い詰めてはいけないと思つた。

一方、園からは「休み癖がつく前に無理にでも登園させるように」との連絡がきた。そのとき初めて、園の言う「統合保育」や「特別支援教育」と私やパパの考えているそれとの間に、大きなギャップがあることに気づいたのだった。療育の場ではあり得ないことだったので、ショックは相当なものだった。

だがここで歩みを止めるわけにはいかない。ユキは日々成長しているのだ。とにかく園とことん話し合いを重ねた。話をする中でわかったのは、ユキを大切に育みたいという根っここの思いや、将来の目指すべきユキ像には何のズレもないということだった。ユキが将来、社会の中に居場所を持ち、周囲の助けを受けな

がらも自分で考え、選び、歩んでいける人になって欲しい、そのための今なのだ。思いが同じであれば、ユキのために園や家庭で出来ることを模索し合い、協力し合うことは難しいことではなかった。何よりも信頼関係が結べたことが大きかった。敏感なユキはきつと何かを感じ取ったのだから。六月から再び幼稚園に通えるようになっていった。

七月。例の短冊に私は苦戦していた。何度尋ねてもユキの答えは「くまのがっこう！」「それはユキの座布団カバーの柄でしょ！」「こんなやりとりには、もう短冊は無理だと諦めかけていた。そんな矢先のこと、ユキはこんな独りごとを口にした。「ユキもいれて！みんなと遊びたいよ！」それは独りごとで片づけてはいけない、ユキの心の叫びだった。ユキの中に芽生えたお友達への思い。一緒に遊びたいのに遊べない、仲間に入れてもらえないことも毎日のようにあるのだろう。それでもやはりお友達が好きなのだ。どうかこのユキの宝物のような思いが、消えませぬように。みんなに届きますように。私は星に願いを託すように、短冊にこう記したのだった。

「おともだちとなかよく、たくさんあそべますように ゆき」

星まつりひらがなでかくねがいごと
みちる

失敗談

中島 睦雄

日本には、昔から連綿として受け継がれてきた美しい伝統がたくさんある。もち論、どこの国にもどこの地方にでも、そのような伝統はある筈である。

しかしそれらの伝統を、美しい伝統を正しく受け継いでいくのは、誰にでもできることではないのだからと思う。

まして現代のように、何やかや忙しく世の中の動きに振りまわされる時代には、あらゆる日本人が、それらの美しい伝統を受け継いで、それぞれの精神や感性を磨いていくというのは、なかなか簡単ではないのだからと思う。

このような前置きを、いや、言い訳を言っておかないと、次の話がどうも具合が悪いことになってしまうのである。

或る時、大分以前のことが、私は或る高校時代の恩師の所へ用事で伺ったことがある。

2、3度伺ったことがあるので奥様も顔を覚えて下さっていた。

何の用事だったか忘れたが、その日に限って「今日はお茶をお入れしましょう。」と、ややおごりかな調子でおっしゃった。

「はあ、お茶と言っても、いわゆる茶道の一端にふれるようなお茶だな。」と私は思った。

少し待つと、奥様が、お菓子を器に入れて私の前に置いてくれた。おいしそうなお菓子である。前に置かれた器から、私はお菓子を二つ取って、一つを口に入れた。奥様はびっくりした様子でおっしゃった。

「あの、お茶では、お菓子は一つ取っていただくんですよ。」

びっくりしたのは、むしろこちらである。あわてて、一つ器に返そうとすると、

「いやいや、正式なお茶席ではありませんから、どうぞ、そのまま召し上がってください。」と、おっしゃった。

「どうぞどうぞ、二つでも三つでも召し上がってくださいね。」私に恥をかかせまいとする配慮が感じられたのである。

正式なお茶の作法を、全く知らない私にとっては、大変勉強になる出来事であつた。

その後で出された、何やら謂れのありそうな茶碗でいただいたお茶は、別においしくもなく、まずくもなく、ただ、ありがたく飲ませていただいたのであつた。

奥様にとっては、何も知らない無作法な奴にまともなお茶をだしてしまつたと、後悔なさつたことであらう。

何年か後のことである。

高校時代の同級生の家に立ち寄つた。奥さんがお茶をやる人である。

「やあやあ、どうも。」と雑談をしていると、奥さんがお茶を運んできた。

「お菓子は二つ取っちゃいけないんだぞ。」と、私は自分に言い聞かせながら、お茶碗を取り上げて、一口飲んだ。

「おお、お茶は、菓子を食べてから飲むんだよ。」

友達も呆れ顔である。

「まあ、良いよ。茶席じゃあないんだ。」と。

またまた失敗である。お茶って、なんてむずかしいんだろう。

或る人が、雑談の中で言った。「お茶なんて、ドンブリで飲んでも、コップで飲んでも、味は同

じだよ。表だか裏だかしらないけどさあ。」

もちろん、茶道に於けるお茶は、そんな単純なものではなく、日本人の得意の“道”なのだろうから、お茶の味だけを云々するのは、間違いであらう。そんなことを言ったら、千利休さんが怒るかも、いやいや、嘆くかもしれない。

「何とまあ、ダメな日本人がいるもんだ。平和な時代、食べ物溢れている時代だというのが、物質的に恵まれ過ぎて、その精神が、反比例して貧しくなつてしまったのか。」

そう嘆くに違いない。

日本人として生まれてきた者として私は、日本の伝統的な、深く美しい作法としての、お茶やお花くらは、ほんの初歩的な部分だけでも教わっておけば良かった、つくづく思う。



子どもたちの季節

仙道家

蒸し暑くなり、少し動いただけでも汗ばむ季節となりました。皆様いかがお過ごしでしょうか。

先日晴れ渡った暑い日、地域の陸上大会が行われました。選手に選ばれた子どもでもない子も、とても一生懸命に練習に取り組んでいました。当日は光の子どもの家の六年生全員が各競技で入賞を果たすという、成果をあげました。

高広は高跳びで二位、彩音は一〇〇メートル走で二位、駆斗は一〇〇メートル走一位、しかも大会新記録を出しました。当日見た行った私やほかの職員たちは応援の子どもたちよりも大興奮していたと思います。普段は見せないその真剣な表情に何より胸を打たれました。また、補欠選手だった利久が家で見せた、悔しそうな表情も印象的でした。

誰にでもできることではありません。誰にでも認められるような結果を残したことに誇りを持ち、

自分にもっと自信を持てるような経験を沢山積み重ねてほしいです。また、悔しい表情をしつつ、きちんと競技を見て応援していた利久には、ぜひ今回の記録を抜いて、今度は下の子に「悔しい、絶対抜いてやる!」と思わせるような姿を見せてほしいと思います。

田口 貴子



光の中で

佐藤家

すっかり秋になりました。皆さまいかがお過ごしでしょうか。

私が担当している芽衣は、4月に小学校に入学したピカピカの

原田家日記

この夏、原田家では私と明日香と一也が家庭菜園を楽しみました。明日香は文明さん(職員)にサポートしてもらいながらキュウリを育て、私は五木田さん(職員)のご指導のもと、一也と一緒にナス、カボチャ、キュウリ、ルッコラ、ラディッシュを育てました。一也は畑の土が大好きで、私が草むしりをしている横で、泥だんごを染しそうに作っていました。「子どもを育てるように野菜に言葉をかけるといい」と教わり、「ナスちゃん、今日もかわいいね。お花を咲かせてとつてもえらいね」と私が話しかけていると、一也もすかさず「やさしいちゃん! いいこね!」と話しかけていました。その姿がなんとも可愛らしく、実った野菜を嬉しそうに持つ姿は、何ともかわいらしいものでした。野菜が嫌いな一也も、畑でできた野菜は嬉しそうに食べていました。

ついつい子どもに注意しすぎて

岩瀬 志穂

漬けの日々が続いております。この経験が将来、晴一の力になることを信じ応援し続けたいと思います。

穴水 祐介



河のほとり

倉澤家

今年度より、高校生が携帯電話を持つことになりました。子どもたちと職員で話し合い、いつ、どんな条件で持つことにするのかを考え、その結果、高校2年生から持てることになりました。なぜ高校入学と同時にではなく、2年生になつてからののか、子どもたちの言い分は、高校生活を1年送り、赤点も無く順調な高校生活が送れるようになってから...ということでした。しかし本当のところは、自分たちは今まで待たされ、やつと持つことができるのに、後輩た

倉澤 智子



しまつて反省ばかりしているような毎日ですが、プラスの声掛けがいつの日か子どもたちの豊かな実りにつながるようにと願っています。

工藤 久恵



季節のおとずれ

竹花家

今年の記録的な夏の猛暑も9月に入り、めっきり秋らしくなってきました。

この夏も皆様のお支えのおかげで、子ども達にたくさん思い出を創ることができました。竹花家の子ども達は同じグループホームの倉澤家のメンバーと共に神奈川県湯河原町に泊り4日海水浴に出かけさせていただきました。お

かげさまで天候に恵まれて、波打ち際で遊んだり、ひたすら泳ぎまくったりとそれぞれ夏の海を満喫することができました。4日目は、新江ノ島水族館でイルカ・アシカショーなどで楽しみ、中高生達は日常、田舎町では遭遇することのできない今時の湘南の若者達を見て驚いておりました。

みんなが海で夏を満喫している中、高校2年生でサッカー部の晴一はこの猛烈な暑さの夏休みに3日間しか休みがないというハードな生活を過ごしました。校内合宿・遠征合宿・選手権試合などで泥人形のように真っ黒に日焼けした顔や手足を見ると、ひとまわり身体と心の成長を感じることができま。昨年の今頃は、まだサッカー部に所属しておらず入部していた部活もうまくいかずにエネルギーをもてあましていた夏休みでした。今年は部活でエネルギーを使い果たし、帰宅後は充電切れでダイニングルームや自室でしばらくは倒れるように眠っています。眠りから覚めると、今日一日の出来事を話し続ける毎日でした。2学期に入ってから晴一の忙しさは変わらず、先発組に選ばれ部活

養育論の試み その13

菅原 哲男

隣る人9 はたらき

先に私たちのほたらきがピンチラ

ンナーかピンチヒッターのような形で、子どもたちに関わることで立ち現れるのだ、と書いた。

代わって立ち現れる私たちのほたらきは、ピンチヒッターやピンチランナーほどの時間や質量では終わらない。何しろこの15年ほどの間にやってきた子どもたちは、親や家族の不適切な関わりかネグレクト（養育にかかわる責任の放棄・不履行）が利用するに至った理由、あるいは原因なのであることも先に述べた。

子どもたちの家族や家庭は徹底して損壊されているのが常なのである。

その大きな要因に、国や都道府県等が定めている定員という制度がある。光の子どもの家にしてみれば設立当初は30名が定員だった。開設して15年ほどして埼玉県は、県内の児童養護施設の定員を引き上げること増加する要養護の子どもたちの増加に対応したのであった。30名でも多いと感じていた私たちだったので、できるだけ定員増はしないようにつとめていた。しかし、県の当時の福祉部長から直々に頼まれて6名の定

員増となったのである。

昨年度の全国の児童相談所で受けた児童虐待についての通報や相談の件数が6700件にもなったのである。前年度から約7000件も増加している。子どもの絶対数は年々減少し続けているのに虐待される子どもの数は激増しているのだ。虐待された子どもたちの受け皿は社会的養護といわれている乳児院、児童養護施設、里親、情緒障害児短期治療施設、自立援助ホームなどであり、それぞれ定員が設定されている。

被虐待の子ども数が激増しているのだから定員を増やして対応するべきだろうとは思っている。しかし、そうはならないのである。勢い児童養護施設を利用する子どもたちの状況は重度化し、悪化してくるのである。

ここにいる小学生の父親から、

「助けてー、死んでしまうー！」と電話。「警察が来たー！」と叫ぶ父親。皮膚がぶつかり合うような音が

続いて電話は切れてしまった。急いで駆けつけると警官7、8人ほどが

家の前を行き来していた。物々しい状態であった。わたしと鈴木洋一は母の姿を見つけて近寄っていった。警察官が名前を確認して父に会わせてくれた。母は、かなり動揺していたが努めて気を落ち着けながら次第について説明してくれた。

父は警察署の医師によって急性ストレス性反応と判断され、その夜のうちにそれなりの病院に措置入院していったのである。

さて、下の子どもたちふたりの居場所をどうするのか。母は光の子どもの家に頼みたいと言ってきた。しかし、定員いっぱい状態である。その上、他の施設を利用するとすれば3人の兄弟は引き離されて暮らすことになる。

光の子どもの家にいる子どもについて父の里である新潟の実家にいる祖父母を、益暮の帰省先に調整してお願ひしてきた。その年の夏休みも3週間ほど祖父母の家に下の子どもたちや親たちが来て一緒に過ごしていた。何回かお目にかかって子どもについて意見を交わしやりとりをしていたことを思い出した。

祖父母宅に電話をして事の次第を伝えた。わたしが迎えに行きたいが仕事を休むわけにも行かないしと途方に暮れた。

それでは私たちが子どもを連れて

現場から

続・光の子らしく

岩崎まり子

金木犀の香りも終わりがな、と

思った頃、どこからか無花果の香りがしてきて、ふり返ると無花果畑の脇の道を通っていたのでした。無花果は、ずっと無花果としてそこに居たのにすっかり忘れていました。

皆さま、お元気ですか。

今回は、思春期という嵐に突入している彩音ちゃんについてです。

「あの日は、何であんな風になっちゃったの？」

ある日の夕食の時、隣の彩音ちゃんに尋ねると、彼女は照れ笑いを浮かべて、

「それが、わかんないんだよねえ……」

と答えました。私は、

「そっか、わかんないんだねえ。」

と相づちを打ちつつ、いろいろなことを考えさせられた。あの日のことを思い返していました。

「あの日」というのは、ほんの二、三日前のことでした。学校から帰ってきてすぐ、

「〇〇に行ってください。」

と自転車を出かけて行ったときは、いつも通りで全く何の違和感も感じませんでした。

夕食時になっても帰って来なかったの、車で迎えに行ってももらっていない途中に、ご近所の同級生



のお母さんから電話がありました。なんと、彩音が帰らたくなかったと言っている状況だったので。その同級生もおうちの方でもとても良い方で、ただただ彩音のことを心配して一緒に捜してくれ、職員も多数探し回ってくれたおかげで、無事に連れて帰ることができました。

最初は、叱られたことやバツの悪さで、床を踏み鳴らしたり悪態をついていましたが、シャワーを浴びた後は素直に、

「いろんな人を巻き込んだじゃって……ごめんなさい。」

と謝ってきてくれました。私は、

「心配したんだよ。もうしないだね。」

と、一言だけ伝えました。

それで一件落着かと思いきや、彼女は次の日も荒れ続けました。一応、その日の夕方には少しづつ落ち着きを見せはしました。

何事にも理由を求めようとするのはあまり賢いことではないのかもしれないませんが、やはり自分の関わりに一因があるのは否定できません。

彩音だけではありませんが、人

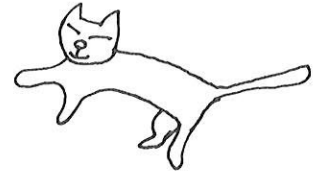
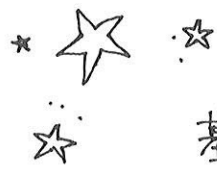
との関係の築き方に大きな、そして非常にわかりやすい課題がある相手に対して、人はどういう思いで接するのでしょうか。私は、いつの間にか、個人の許容範囲を社会的な許容範囲と決めつけ、その中に収まるよう、相手が変わることをだけを期待し、強要していたのではないかということに気がかきました。

日常はささやかだけれど、積み重ねていくことで大きな力になっていくものです。プラスもそうですが、マイナスも同様でしょう。ちよつとした心の傾きが、ボタンの掛け違いが、おどきなズレとなつて関係を壊していく……。

けれど、気付いたところからまた改められるのも日常のありがたいところ。私も改めて彼女の寂しさや苛立ちに歩み寄りながら、少しづつかもしれないが、関わり直していきたいと思っています。

まだまだ季節の変わり目です。皆さま、どうぞご自愛下さい。





来年度(平成26年度)も

基準外職員確保のための

バザーを行う予定です。

バザー用品のご協力をよろしくお願いします。



光の子どもの家バザー実行委員会



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2013年4月~6月

2013年2月現在

幼児4名 小学生15名 中学生9名 高校生8名 その他1名 37名

- 1日 小学生の駆斗が入所 和田保育士が担当する 運動が得意な活発な男の子
- 5日 進級進学祝い 新しいランドセルや制服を着てすこし照れくさそうな新1年生たち それぞれの場所で目一杯頑張っている様子
- 9日 小学校中学校高校それぞれ入学式 緊張した面持ちだが確実に大きくなっていく子どもたちの姿にたくましさを感じる
- 11日 芹沢俊介氏による施設内研修
- 20日 聖学院大学の学生によるワーク
- 26日 古河農友会の総会へ田中施設長と鈴木指導員が出席 いつもたくさん野菜を頂いている 心から感謝
- 30日 中学校との連絡会 今年も多くの中学生在お世話になっている 連絡会に加えて日々のやりとりもお願いしている 感謝
- 5月
- 4日 子どもまつり 子どもたちが準備した出し物に加えて早川さまの楽しい金管楽器演奏や宝道さまの力強いジャンプ演奏で楽しい時間を過ごす 感謝
- 8日 赤十字奉仕団による除草作業と光の子どもの家後援会によるそば会 心より感謝
- 17日 芹沢俊介氏による施設内研修
- 18日 小学校運動会 晴天の下で子どもたちの全力で頑張る姿が見られた

25日 第102回光の子どもの家理事会

- 6月
- 2日 小さくても大バザー 今年も後援会の皆さまやしずくの会の皆さまはじめ多くの方にご協力いただき開催 天気にも恵まれ大盛況 感謝
- 8日 里親希望者事前研修で17名の里親希望者と児童相談所職員が来訪見学
- 14日 芹沢俊介氏による施設内研修
- 21日 若月健吾牧師による職員礼拝 司式説教奉仕感謝
- 29日 カリフォルニア大学からインターンシップ生として去年に続きトム・リーダーが来訪 今年も子どもたちとともに夏を過ごす

<4・5・6月の物品寄贈者各位>

相見篤子 横尾友子 根岸亜麗朱 天野登美子 金子光代 宮本美和 中村久美子 鳥越宏子 西村和奈 暁星小学校 白石和子 佐々愛子 島野常一 古川景子 志賀智江 ジョンソン エンドジョンソン 山口榮子 松本静江 新井摂子 木田靖晴 福楽 堀川ちよ 宮崎晴子 藤沼畜産 三戸部如玉 小山田貴子 伊村明子 富士見ヶ丘キリスト教会 小池房世 伊村幸子 柿内常盤 神田美智子 松本明子 竹内阿久利 内藤芳江 奥田のり子 福島明美 内藤祐子 加藤晶子 長田美紗子 杉山和俊 大川誠子 曾根秀子 豊国道江 神田まさよ 蓮田善英 小田切末由美 マルキチ物産 生沼不二繪 セカンドハーベストジャパン ほか多数
☆おかげさまで子どもたちは夏を目一杯楽しみました。これからもよろしく願いいたします(洋)

////// 反 射 光 //////////////

☆台風の影響で悪天候が続いたり、寒暖の差が激しい秋となっております。☆先日、東日本大震災で甚大な被害のあった宮城県名取市の閑上地区を訪れました。2年半が過ぎててもなお、バイクが雨ざらしのまま雑草に覆われ、布団叩きなどの生活用品がそこかしこにありました。震災から経過した時間が、被災地から遠く離れた私たちの意識を限りなく日常に戻しますが、被災地では今もあの瞬間から全く変容してしまつた生活が続いていることを感じました☆私たちの目の前にいる子どもたちもまた、全く変容した生活を今も送っているのです。親と一緒に生活という、子どもがあえて願うこともしないような当然の生活が不可能となり、何の負い目もない子どもが住む場所を移されたのです。私たちの意識を何度でもその子どもが感じたであろう不安や悲しみ、怒りに寄り添うように戻さなければ、今子どもたちが直面している問題には手が届かないだろうと、改めて自戒しております☆祈りつつ、祈られつつの歩みをこれからもお支え頂きますようお願いいたします。

(洋)